

シンポジウム開催報告

農研機構シンポジウム 2014「東アジア地域におけるサツマイモ研究の新時代」開催報告

2014年11月28日(金)～11月30日(日)に、農研機構シンポジウム 2014「東アジア地域におけるサツマイモ研究の新時代」をかごしま県民交流センターにおいて農研機構作物研究所と合同で開催しました。このシンポジウムは、我が国でサツマイモの人工交配による育種が開始されて以来100年となる節目に、中国、韓国、日本におけるサツマイモの現状と将来展望、最新の分子育種技術から加工利用の実需関連情報まで幅広く取り上げて各国の研究者や関係者間で情報交換することを目的として、国内外から約180名の研究者が一堂に会して開催されました。

基調講演では「東アジア地域のサツマイモ—これまでの進歩と今後の展望」と題して、日本、韓国、中国の3名のサツマイモ研究者から各国における研究の最前線が紹介されました。中国農業大学の劉慶昌(LIU Qingchang)教授は、“Sweetpotato Molecular Breeding in China (中国におけるサツマイモの分子育種)”と題して、世界最大のサツマイモ生産量をもつ中国において精力的に進められているサツマイモゲノムの連鎖地図作成、DNAマーカーの開発、収量性関連のQTLの同定、遺伝子組換え育種などのバイオテク手法を活用した育種の現状と将来構想を紹介しました。韓国生命工学研究院の郭尚洙(KWAK Sang-Soo)博士は、“Sweetpotato as an Industrial Bioreactor on Global Marginal Land (未

利用地での物質生産バイオリクターとしてのサツマイモ)”と題して、サツマイモを世界の未利用地で栽培可能にするためのストレス耐性(耐旱性、耐塩性、低温耐性など)を付与する育種の取り組みについて紹介するとともに、食料としての利用のみならずバイオマスエネルギー資源や有用物質生産のための手段としてもサツマイモを利用する構想を紹介しました。農研機構九州沖縄農業研究センターの高畑康浩 上席研究員は、“Sweetpotato in Japan :Past and Future (日本におけるサツマイモ、過去と未来)”と題して、日本におけるサツマイモの導入から明治時代に沖縄などで開始された近代育種の育成品種、戦後の食糧増産を担ったでん粉用多収品種などの育種の流れを振り返り、近年の青果用良食味品種、紫色やオレンジ色の色素を含む有色品種、デンプンの性質を改変した新規加工用品種など近年多様化しているサツマイモの育種について紹介しました。さらに5つの分野別の講演セッションで計27題の講演が行われ、また57題のポスターセッションが行われ、各国の研究の最新成果が紹介されるとともに海外の研究者も交えた議論が活発に行われました。

今回のシンポジウムを通じて、各国のサツマイモに関する研究や技術開発が一層活性化し、サツマイモの研究において世界を東アジアからリードする研究戦略の構築や東アジア地域のさらなる発展と安定化に資することが期待されます。



シンポジウム会場の様子



農研機構シンポジウム参加者の記念写真

九州沖縄農業研究センター

ニュース No.50

平成27年1月29日発行

編集・発行 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

九州沖縄農業研究センター広報普及室

〒861-1192 熊本県合志市須屋 2421

TEL.096-242-7780,7530 FAX.096-249-1002

公式ウェブサイト <http://www.naro.affrc.go.jp/karc/>